
ヒメゴト

藤波綾綺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒメノト

【Zコード】

Z7848X

【作者名】

藤波綾綺

【あらすじ】

異世界転生をやらかした若干やる気のない主人公とロリコン疑惑な皇太子の攻防に、さらに精霊やら家族やらを巻き込んでの大騒動勃発。なお話を目指しています。前後編の予定。

「うーん、困った、ねえ？」

と、わたしがそう言つたら、周りにいたメンバーに、「絶対困つてないだろー！」とつっこまれました。みんなひどい。

さてさて、事の始まりは、わたしが異世界転生？というやつをやらかしたことに始まる。なんでそんなものに巻き込まれてるのかなあ、ふつうの輪廻転生で全然いいのに、と思つたりなんたりしてたんだけど、まあ前世の記憶を持つて転生できるなんてことあんまりないだらうし、面白いかな、と思つてそれなりに転生ライフをエンジョイしていく。

転生ライフは魔法あり、王子様あり、のふあんたじーな世界でした。

つーか、お父様がそもそも公爵つてどうよ。お母様もそうだけどお二人とも美人すぎる！田がまぶしいから直視しないで！なレベルです。まじで。

ついでにお兄様とお姉さまもさすが美男美女の息子、娘なだけあ

つてまぶしい。せりあひしあわせですよ。サングラスが欲しいといふんです。

んで末っ子のわたしもそれなりに両親のいいところを継いだみたいで、可愛ないと大評判。親のひいき田だと思つてます。鏡みたらそれなりに可愛いのレベルで、お母様やお父様たちのレベルには到底至らない。でも、そのくらいの方が、生きていくうえではたぶん、いいと思うんだよね、ってわけでわたしは自分に満足していた。

前世はなんとこか分子図鑑買っちゃった、やつたね、みたいな生活を送つてたらトラックに突つ込まれ即死エンドみたいな終わり方だったと思う。あんまり気分のいいものじゃないから、そこらへんは思い出せないようにしてることもあって、あやふやだ。とりあえず、どつかかっていつと何かにのめりこむタイプの大学院生として日々を過ごしていた。

勉強、つて聞くとなんか嫌なんだけど、興味があることについて知るのは好きなので、興味があることはとことんやっちゃうぜ!といつ道を走つてたらいつのまにか大学院生になつていたのだ。そのうち、ヨーロッパかどこかに留学したいな、と考えていたところだつたので、転生先が中世ヨーロッパにファンタジー成分をこんじりな世界だったのはうれしい限りだ。留学みたいなものだよね。

というわけで、わたしは転生ライフを心底エンジョイしていたのだった。

転生先でわたしがのめりこんだのは魔法と精霊術。魔法はじぶんのなかの力を利用するのに対して、精霊術は世界にあふれている精霊にいろいろお願ひする力らしい。よく違ひはわからないんだけど、こんな前の前世にはなかつたから面白くてたまらない。だって、ほんまもののタネも仕掛けもないマジックですよ？何もないところからお花がぱわあって咲くんですよ？分子図鑑レベルに面白いよ！

転生したからなのかなんのかはよくわかんないけれど、わたしはお約束のごとくチートだった。魔法はまだわたしの体が小さいこともあって、リミットはそれほど大きくないのだけれど、精霊術に関するといえば、わたしの力なんて使わなくていいので、精霊さんが力を貸してくれる限りは無限に術を使える。

わたしは公爵の末娘ということもあって、なかなか同年代の友達を作るのは難しい。だから、わたしのおともだちは精霊さんばつかりだつた。魔法よりも精霊術の方が難しいなんて知つたのは、わたしが15歳の誕生日を迎える頃だつた。そのころまで、わたしは精霊は誰にでも見えるし、遊べるんだと信じていたのだ。

「お前、名前は？」
「ええと、リリーナです」
「ふうん、リリーナか。いい名前だな。またな」

ある日、いつものように公爵邸で精霊たちと遊んでいると、これ

またきらきらな人がどこからともなく現れて、名前を聞くとどこかに去つて行つた。

わたしがいたのは公爵邸でも奥まつた場所にある庭園で、ここに不審者が入り込むとは考えにくい。しかも、精靈さんたちはいつでも神出鬼没な上、人間の姿かたちを真似て現れることも少しつちゅうだつたから、その男のひとも精靈さんのうちの誰かだと思つたのだ。精靈が人の姿になると美形だし。

それが間違いだつたと気づいたのは、精靈さんたちと一緒に遊んで、疲れたし、おやつ食べたいな、と公爵邸内に戻つたときだつた。

「リリーナっ」

わたしの名前を呼んで抱き着いてきたのは、いちばん上の兄様でラルフ兄様だ。金髪碧眼というまさに王子様そのもの。まぶしすぎて相変わらず直視できない。こんだけきれいならさぞ女装も似合いそうだ。

「にいさま、なんでうちにいるの？」

わたしとしては至極まともな質問をしたつもりだつたのだけれど、ラルフ兄様にしてみたらそうではなかつたらしい。

がーん、という効果音が相応しい形相になつてゐる。

「リリーナは僕がいてもうれしくないの？」

今にも、世界に絶望したといわんばかりの顔になつてゐるけど、やっぱり美形だから写真集なんかにしたらファンには売れそうだつた。

「いや、嬉しいけど。でも、兄様の仕事の邪魔をしてはダメでしょ

兄様の百面相を見るのも面白いけれど、楽しんでいたら話が進まないのも事実。兄様はわたしの八つ上だけど、転生前の年齢も足せ

ばわたしの方が年上。だからわたしが譲歩してあげるのが内緒のお約束、というやつだ。

「リリーナ、よく聞いてくれ」

美形な真剣な顔をすると、一気に曇ドラな匂いがするなあ、とわたしはそんなことを内心では思いながらも、小首をかしげてみせた。

「うひ、可愛い、可愛いよ、リリーナ。ってそうじやなくて、いや、可愛いいんだけど、リリーナ、あのね、今日誰かに会わなかつた?」「お母様とお父様と、兄様姉さまたちに、あとメイドのジョアンナとか、精霊さんたちとかに会つたよ?」

とりあえず、今日会つたメンバーを思い出しながら口に出すと、ラルフ兄様はいや、そうじやなくてね、と肩を落とした。

「ラルフ、あなたの聞き方が悪いのよ、今のは」

そう言つて、わたしとラルフ兄様がいる室内に入ってきたのはお母様。銀色の髪にアメジストの瞳というなんとも神秘的な美貌を持つ母がわたしは大好きだ。わたしは母のもとにぱたぱたと駆け寄つた。

チート、なのはよかつたのだけれど、落とし穴というかなんといふか、わたしはたいそう体の成長が遅かつた。なんでも体のなかにある魔法力が大きすぎるせいで、なかなか成長できないらしい。だからわたしは15歳の誕生日を迎えてもまだ10歳くらいの体しか持っていない。残念だけど、まあ仕方がない。わたしが公爵邸からほぼ外に出たことがないのも、これが理由だった。

お母様になでなでしてもらつていて、お父様も室内に入つてきた。お父様は金髪に緑と青の中間のよつた瞳をしている。そのうち、髪の毛が真っ白になつたら素敵ダンティーになること間違いなし、だ。

「どうやら、ラルフ、間違いはなによつだよ。先ほど、王からも内申があつた」

お父様に抱き上げられて、喜んでいると、お父様と兄様はなんだか浮かない顔をしている。

「お父様どうか、なさいました？」

「リリーナ、今日、誰かにその名前を名乗つたかい？」

「ええと、はい。精霊さんたちと遊んでいたら名前は、と聞かれたのでリリーナと答えたのですが、いけなかつたのですか？」

「あちやー」

わたしの解答にお兄様がへたりこんだ。あれ、なにかいけなかつたのだろうか。公爵邸内に入るくらいだし、精霊さんかもしれないし、いいかなあとthoughtたんだけど。

「それね、皇太子だから」

「はい？」

「そつかあ、リリーナは社交界出てないからそりや知らないよなあ。リリーナが今日ね、名前を教えた相手はこの国の皇太子。次の王様だよ」

兄様の言葉を聞いても、ふうんとしか言いようがない。さすがファンタジーな世界だけあっても皇太子も美形なんだな、と感心するくらいだ。

あたしの関心のなさがわかつたのか、兄様が再びへこたれていた。どうでもいいけど、兄様へこたれすぎだと思う。こんなにすぐへこむ人が要職に就いていてもいいのだろうかと若干不安になる。でもメイドのジョアンナとかの話によれば、仕事している兄様は別人らしいから、心配はいらないかもしない。

「リリーナ、王族に名前を聞かれる意味がわかるかい？」

兄様に代わってお父様に質問された。名前を聞かれるってそれは一般的には仲良くなりたいとかそういうのだよね。

「おともだちになりましたよ、とかそういうのではないですか？」

あたしの言葉にみんなそろつて肩を落としていた。いつの間にか室内にいた家令のスチュアートまでもがやれやれ、という顔をしている。あれ、あたし、そんなに変なこと言つてないよね？

「リリーナ、王族から名前を聞かれるというのは、求婚のしるしなのよ」

「求婚、ですか。はあ。それは、お母様、もちろん、あれですよね？お庭に埋めたりするやつじゃありませんよね？」

「そうね」

「うーん、困った、ねえ？」

と、わたしがそう言つたら、周りにいたメンバーに、「絶対困つてないだろーー」とつっこまれました。みんなひどい。

というわけで、冒頭のセリフに戻るわけだ。

ここで、公爵邸内にまでついてきていた精霊たちががやがやし始めた。先ほどまでは大人しく傍観していたみたいだけど、皇太子に

求婚された、というのがひつかかつたらしい。

「絶対やるやーん! リリーナは俺らのものだ! 人間なんぞにやるか
つ」

「お前らのものといひには間違つてゐるが、人間なんぞにやれな
いといふのは賛成だな」

「さうよねえ。リリーナが人間の世界でつまへ生きていけるわけな
いものねえ」

最後のひとことは余計だ! と言いたいが、精靈たちはどーだ? 一
だと勝手に話し合つてゐる。じつなつては止めるのも一苦労なので、
放つておくのがいちばんだ。

「で、リリーナ。ことの重大さは理解したかしら?」

「ええと、一応。それってお断りすることはできないんですね? ほ
う、『デビュタントもまだだし』

そう、本来であれば12、3歳くらいで『デビュタント』に臨むのが
一般的なのが、あたしは成長が遅くいまだ10歳程度の体しか持
たない。とても『デビュタント』についていけるほどの体力はないので、
15歳になつてもあたしは社交界というものに出たことがなかつた。

「皇太子から名前を聞かれたつてことが公にならなければまだお断
りすることもできたんだろうけど。あいにくすでに王に知られてい
るようでね。家柄や年齢、教養などからお前は皇太子の嫁にはぴつ
たりなんだよ」

前（後書き）

急に書きたくなった異世界転生もの。王道でんじもじで頑張りついでいます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7848x/>

ヒメゴト

2011年10月21日12時11分発行